

幼児の唱歌指導

渡 部 榮 藏

恐らく子供程唱歌を好むものはあるまい。或る意味で見
るにき子供の生活は音楽の生活であり唱歌の生活に終始し
て居るに云つても過言ではあるまい。彼等の生活をじつと
見て居るにたえず唱歌を歌つて居る、唱歌を歌つて居るば
かりではない、話して居る言葉が殆ど旋律の流れに依つて
統制されて居る、朝起きてから夜寝る迄の子供の音聲表現
を音譜に採つてみるならば殆どすべてが或旋律音になつて
居るであらう。オカアサンミ呼ぶ聲、イヤーヨミいがむ聲
を初め友を呼ぶ聲、まゝごみ遊び、おねだりの語調に至る
迄皆旋律音の範圍を出でまいと思ふ。もし假に大人の音聲
生活を散文に例ふならば子供のそれは韻文に例へる事が出
來よう。子供の音聲生活は詩であり音楽である。彼等はそ
れを無心に生活して居るのである。入學當初の尋常一年の
子に「ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサ」を

讀ませるに、その單語としての言葉を讀むよりも次の如き
唱歌にして唱つてしまふ。國語の先生が汗だくになつて訂
正しても



語感表現なきは超然と捨て去つて相變らずリズムに代へ
メロデーに歌つて了ふ。試みにアイウエオ五十音を、一二
が四ノ九九を、稱へさせてみれば此の事實が更に明白に裏
附けられるであらう。「子供は詩人である」に詩人は云ふ。
同じ様に「子供は樂人である」に云ひ度い。彼等は何のこだ
はりもなく旋律に生き韻律に遊び音楽を生活して居るから
である。

幼児の唱歌指導は此處に規ひ處を定めて行はなければな
らぬ。此の幼児の音楽生活を巧みに指導し擴充していく處

に幼児の唱歌指導の使命がある。價値があり、意義がある。だから幼児をして唱歌を生活し音楽を生きて行かしめる事が出来ないならば、凡百の唱歌指導が利なく却つて百害を醸すに至るであらう。徒らに奇抜な歌曲を探り若くは音樂會等のステージを目標として指導したりする如きは此の弊に陥るものゝ一例である。

以下幼児の唱歌指導に關して希望の二三を述べれば

一、音樂上の理論に捉はれぬ事

所謂、理論倒れにならぬ事である。統制された原理に依るは宜しいが多くの場合、部分的抽象的な理論に流れ徒らに樂的眞のみを追ふて行くが之は慎むべき事である。音程がさうの調和がさうのリズムがさうのミ八釜しく理論的正確を要求する時子供は唱歌から離れ音楽を疎んじてしまふ、離れてしまつたらそこにはもう爾餘の仕事は總て意義を失つて居る事になる。

我々が幼児の唱歌を聴く時、大別して二つの型を見る。一つは聲を歌ひ音程音長を歌つて居るものであり他の一つ

は歌曲の中味を歌ひ自己の心を歌つてるものである。その何れを探るか、無論後者を探る。聲を歌ひ理論を歌ふ態度は専門家の方法的態度であり、研究家の科學的領域に屬する。此の態度に幼児を引ずり込んで生命のぬけた唱歌の外形的理論を歌はせるのなら、理論的には幾多の缺陷があつたにしても幼児が心から歌ふ生命の唱歌の方が、遙に教育的であり有意義である。だからさいつて樂論を全然無視して良いさいふのではない。要之、幼児の心情の圓滿な發達に脅威を來す様な事の少しでもあつてはならないこの心やりからの警戒であり、唱謠趣味は、音樂情感の培養には必ず幼児の心理發達の段階を考慮してこの希望なのである。

二、技術教練に迫はる、如き事のなき様に

二、三歳の子供が手足を動かしてあやしげに歌つて居る童謠をきいてみるに、其處には音程もなければリズムもない。併しその子供自身の程度に於ける音程やリズムを以て無心にその童謠の中に浸つて居るではないか。我々は此の童謠に無限の美を感じる。音程もか音階もか發聲もか發音もか他の諸々の技術的表現素材は一の文化發達の経路に於

て兒童の音樂性を開發していくものである。徒らに技術の上達を得んじして練習を課しても、それが子供の發達段階に合致せぬ限り無益有害の結果を招來するのみ。だから七聲音階の歌曲をみんなに練習さしても子供は五聲音階の歌曲に訛つて了ふ。理論的の發聲法を無性に訓練してみても決して幼兒には成人にみる様な美しい聲は生み得るものではない。少し位の音程は違つたら違つたでいゝ、發聲がまづけりやまづいでいゝ(但し喉を害ねる様な不自然な發聲はいけない)そして其處に自己化された歌曲にでも幼兒が己れを空しうして口誦んで居ればそれでいゝのである。短六度が正しくないか、その附點音符をもつゝ長くさか云つて、やつきまなつて技術を練つてみてもそれを統制していく能力にまで育つてない幼兒はまさに縁なき衆生である。幼兒をしてその能力に於て自己陶醉境にさまよはさんとする教師の心掛こそ、技術ならざる技術を以て目に見えぬ程大きな技術を練磨し得るものゝ信ずる。巧みに唱はせて參觀人、父兄をあつゝさせたり、きれいにそろへて音樂會に喝采を博したりしたいのなら、ごつかのレヴェニューにで

も雇はれない限りあまり必要のない事である。

三、唱歌を通しての愛のはたらきである

春の田園に漸く巢立つた子雀を連れ出してその鳴き方を導いて居る親雀の態度で行はるべきである。専門學校ではない。上手な唱歌を歌はせるのではない。小生意氣な幼音樂家をステージに送る爲でもない。歌曲の中に秘められてる藝術的神祕性を教師に於て内感しその感情を通して眞に其の感情を通して以て幼兒への感悟を意味する滲透作用こそ眞の意味での唱歌指導である。幼き時泣きやんで母の胸に聞いたあの子守唄、音樂的には何等の價値も認められぬ程平凡なあの子守唄の唱謠に無限の美を感じるのは何の力ぞ。受持つ子供に音痴の子供があつたらその音痴の子供にも内感させ得る教師の響き、もし啞の子供が居るならその子にも聽かせ得る教師の心の響き、その響きを持つてこそ本當に唱歌を指導する事が出来るものである。此意味で教師は十二分歌曲の生命にタッチし得て、そして幼兒の心情に立歸り彼我の境壁を除いて共に共に歌つていき、タッチし行く處に幼兒教育に於ける唱歌の價値を見出さんとする

ものである。教へるのではない。勿論授けるものでもない。唯同じ場所と同じ心で一所に歌つて居る——その中に必然的に浸潤していく音楽的暗示であり樂的感化である。外形的に整へられた唱歌がたまたま指導者のかうした意識の缺陷によつて興味乾燥な聲音配列ミ化してしまふ様な事は極力警戒しなければならぬ事である。

四、唱歌を生活させる事

子供の生活は一元的であり綜合的である。だから大人よりずつと樂に音楽を生活し唱歌を歌ひ得るのである。唱歌の中に綜合された自己を見出し得る力は子供の方が遙に優れて居る(我々は此點を見てやらねばならない)けれどもその態度は常に動いてゐる。大人の見る様な自制力が無い爲に單一純粹乍らも次から次へミ移つていくのである。唱歌が或特定の場所に塞され限定された時間の束縛を得て行はるゝ事に依つては完全にその使命を果す事が出来ないものである。即ち隨時隨所に口ずさみ居る時、心から歌つて居る時——それが生活であり又指導の目標になるのである。まゝ遊びやお砂場遊びに耽つて居る時、無我の境地に

入つて自づこ口唇の外にもれ出た唱歌がある。その時その子供は眞にその唱歌を生活して居るのである。たゞ外形の作業が歌曲内容ミ相違する事があつてもそれは問題ではない。又遊戲に合せ、歩調に動作に合せ乍ら「オツキサマイクツ」ミ歌ひ「オテ、ツナイデー」ミ誦じて居る子供は屹度その唱歌の心になりきつて居るのである。生活して居るのである。此の際客觀視されたる技術の巧拙唱法の正否等は問題ではない。教師は此の境地に幼兒を導く爲に環境整理、説話、遊戲其他適切なる方法で第一にその唱歌意欲を喚起しなければならぬ。薪に火を附けんミする時マッチを擦つて直ぐその薪に觸れても火はつかない。古新聞、焚つけ其他の燃え易き介在物を燃して發火點に達した時、薪は始めて自ら燃える、自らその内容を燃えて居る姿が生活なのである。平凡な例ではあるが、幼兒の唱歌指導には良い暗示を與へて居る。他の方面から見ても何等かの拍子に子供がいゝ氣持で唱歌を歌ひ出す事が應々ある事實である。此の時都合の許す限りその唱歌を生かしてやらねばならぬ。こめだてするにはよくよくの事情がなければならぬ。

一寸附言するが教師の示範(範唱)が幼児の能力をあまり距つてはならぬ。専門家の様な立派な技術を以て幼児の前に歌つて聞かせてもそれは宛もカントの哲學でも講義する様なものである。子供の頭上をかすり吹いて向ふの壁にぶつつかる丈けのこゝ。此の客觀的表現は幼児の能力の一寸上を行つて居る位でなければならぬ。細心の注意を持つ指導意識を離れてない教師ならば、殆ど幼児の能力の同等の程度の表現に依つて共に唱歌を生活していくのが最もいい態度である。

五、幼児の唱歌を悪用してはならない

此の悪用といふ事が教育行事さか云ふ美名の下に相當多く行はれつゝある現状を悲しく思ふ。父兄會、母姉會、音樂會、何々會を催しあざけぬ幼子を衆人の前にさらけ出して「可愛いこゝ」の「人形の様だ」の云ふ大人の快感に媚びる如きは唱歌指導の立場からは甚だ賛成の出来ない事である。大人がさうして自己満足に酔ふて居る時、幼児はその純真さを衆人環視の前に踏みつけられて居る。私はステージの上で技術の競争をさせて宛も軍鶏の喧嘩を見てる様

な長閑な氣持で聞いている人の氣が知れない。又出演兒を或特定の數名に限り残された他兒の心に暗い影を残すなきはたまらなく淋しくさせられる事である。但し他の種々の方向から見て償ふて餘ある教育價値を幼兒の上に認むる場合はいゝし、又深甚なる注意の下に行はるれば如上の如き弊を少なくし得るものである。要之敢くまでも幼兒の立場になつて之を行ひ大人の經營者の功利心や名譽心を満足させんきする様な不純な動機に立つ如きは最も慎まねばならぬ事である。

以上五項に渡つて希望と意見を述べて來たが此の外實際指導上について云ひ度い事が數々あるけれども今回はそれ程に迄筆を入れる事が出来なかつた。歌ふ事であつて筆記性の少い唱歌指導上の事は兎角文には書けぬものが多い。文旨が少し概念的に陥つた様な傾向のあるのはその爲である。其の點隔靴搔痒の感の切なるものがある。